

# 大君の精神世界

山田 はるみ

## はじめに

大君は最後まで薫の恋情を受け入れることなく、その生を閉じたのであるが、そのような大君の生をめぐっては既に様々に論じられてきた。その薫拒否が思想的なものであるという見解が示されて<sup>注1</sup>いる一方で、その拒否は自己愛に貫かれたものにすぎないといった見解も示されている。このように大きく隔たった大君像は、いずれも大君の一貫する薫への拒否の必然性を解しかねるとするところから導き出されてきたように思う。そのような意味において、武者小路辰子氏<sup>注3</sup>が、大君は「忍びの恋の相手」となることを恐れ、「自ら親の代理となり、薫君の誠意は信じて、妹のむこ君として遇し、二人の結婚の承認者として結婚の世話をしよう」としたことを指摘されたことは注目に値しよう。高野裕子氏<sup>注4</sup>が「後見のある正式な結婚を希求していた」大君を、物語に即し

て指摘され、その拒否に必然性を認められたが、武者小路氏と同じ方向にあるといえよう。私も両氏の捉え方に賛同するものであるが、なお、大君の薫への心情をめぐっては、従来論じられてきたことに疑問を感じるのである。

大君の薫への心情をめぐっては、結婚を拒否することにより、肉体的な愛を否定し、薫との精神的な愛の永遠化、あるいは「あはれ」の不易をのぞんだとするのが、大方の解釈のようである。<sup>注5</sup>しかしながら、大君の内面にそのような肯定的、積極的な薫に対する「あはれ」の情はみとめられるであろうか。上の様な解釈に立つ以上、大君を「二元的」<sup>注6</sup>な思考をする女君であるとか、あるいは既に紹介した、自己愛に生きた女君であるとかの捉え方から離れることはできないのではあるまいか。

ここでは、大君の心情に焦点をあてながら、不遇な現実の中で、精一杯その現実と対処しながら、その賢明さ故に、誠実さ故に一

人傷つきながらも、それ故に到達し得た精神世界に光をあてていきたい。

一

(一)

大君の薫への心情が具体的に描き出されるのは、椎本巻で八の宮の死を傷み弔問に訪れる薫に対しての、次の様な箇所である。

かかる御とぶらひなど、また訪れきこゆる人だになき御あり  
さまなるは、ものおぼえぬ御心地どもにも、年ごろの御心ば  
へのあはれなめりしなども、思ひ知りたまふ。(椎本一八

二頁)  
注7

「訪れきこゆる人だになき御ありさま」という描写に、八の宮の死後姫君達が直面しなければならなかった厳しい現実が如実に示されている。この後に薫が「慰む方なげなる御身ども」と同情を寄せたという描写があるのだが、実際に、宇治の山里にとり残された姫君達の立場は不安定な行く末も覚束ないものだったのである。父宮の死に嘆き悲しみ、「ものおぼえぬ御心地」であった姫君達ではあっても、薫の肌理細かい配慮は充分有難いものとして伝わるのである。「年ごろの」とあるように、その薫の厚情は八の宮生前から持続したものである故に、一層姫君達の心に響く

のである。このような姫君達の心情は以後の薫への対応の中で徐々に深められていくのである。

御心地にも、さこそいへ、やうやう心静まりて、よろづ思ひ  
知られたまへば、昔ざまにても、かうまで遙けき野辺をわけ  
入りたまへる心ざしなども思ひ知りたまふべし、すこしゐざ  
り寄りたまへり。(同一八九頁)

薫の「御忌はて」での、訪問の際の大君の心情である。「昔ざまにても」とは、この前に描かれている薫の言葉の、「昔の御心むけに従ひきこえたまはんさまならむこそ」という箇所に対応しているといえよう。即ち、先程あげた場面と同様、ここでも、故八の宮と薫の親交が、薫と姫君との関係を近付ける方向に働いているのである。そして、ここで注目したいのは、さきほどあげた箇所「御心地ども」と姉妹共通の思いとして描かれていたのが、ここでは明確に大君その人の心情として描出されていることである。そしてそれが「すこしゐざり寄りたまへり」という具体的な行為として示された時、薫と大君の関係はより親密化していくことが予測されるのである。

(二)

「雪霰降りしくころ」とあるように、宇治は厳しい気候をむか

える。「いとど人目の絶えはつる」年の暮れである。

雪もいとところせきに、よろしき人だに見えずなりにたるを、  
なのめならぬけはひして軽らかにものしたまへる心ばへの、  
浅うはあらず思ひ知られたまへば、例よりは見入れて、御座  
などひきつくろはせたまふ。(同一九七頁)

雪に降りこめられた姫君達の、心細い不安に満ちた状況が強調された後に描かれるこの薫の訪問が、姫君達にとってどれほど心強い、有難いものであったかは想像に難くない。「浅うはあらず思ひ知られ」という簡潔な表現にそれは示されているのだが、これが(一)においてみてきたものと連なるものであることに着目した場合、一層理解し易いであろう。

さて、このような薫の訪問を、薫自身は姫君への言葉の中で、「雪を踏みわけて参り来たる心ざし」として、伊勢物語八十三段(「天福本」による)の、業平の惟喬親王への訪問に擬すのであるが、これは、薫の言葉の中でのみ働いているのではなく、薫の訪問を描いた一節自体が伊勢物語八十三段をふまえて描かれているとみていいのではなからうか。

伊勢物語八十三段では、業平の訪問を「正月」に設定しているが、ここでは「新しき年はふとしもえとぶらひきこえざらん」として、年の暮れの訪問として設定されている。しかしながら、都

での政治的世界における正月の公事を両者が抱えていることが示されるのは、双方とも、その篤実さが強調されることに他ならないのである。そして又、「比叡の山ふもとなれば、雪いとたかし」という八十三段の状況と、この場面の「雪もいとところせきに」、「いと雪深きを」、「雪霰降りしくころは」という描写は、ともに、訪問を受ける側の不如意な状況と、訪問者の行為が深い心情に裏打ちされたものであることを示すことに他ならない。

さて、伊勢物語八十三段は周知のように、惟喬親王の皇位継承争いの敗北とそれ故の出家を裏面に読みこむことができるのであるが、そのような意味において、惟喬親王は八の宮のモデルとしても捉えられてきた。<sup>注9</sup>この場面において八十三段がもちこまれてくることの意味は、薫の訪問の性格が単に大君への恋情に駆り立てられたものではなく、故八の宮との親交に裏打ちされたものとしてあることを示しているのではなからうか。そして、それは(一)において既に示した「年ごろの御心ばへ」、「かうまで遙けき野辺をわけ入りたまへる心ざし」という箇所にも敷衍して捉えてよいのではなからうか。この場面を読み進めていきたい。

「例よりは見入れて」という大君の薫への対応は、対面の場面においても「うちとくとはなけれど、さきざきよりはすこし言の葉つづけてものなどのたまへる」という風に引き継がれている。

そのような大君を前にして、薫は慕情を募らせていくのだが、薫は匂宮の懸想を大君に告げ、「必ず御みづから聞こしめし負ふべき事とも思ひたまへず。それは、雪を踏みわけて参り来たる心ざしばかりを御覧じわかむ御このかみ心にても過ぐさせたまひてよかし」と、その匂宮の懸想が中の君に向けられたものであることを云々し、又、自分の篤実さを解してほしいと、八十三段を持ち込んでくるのである。薫は、「御返りなどは、いづ方にかは聞こえたまふ」と問い質すのだが、それに答える大君は、「雪ふかき山のかけ橋君ならでまたふみかよふあとを見ぬかな」と、まことに率直に匂宮との交際を否定するのである。このような大君の率直さはまさに、薫の、業平的な篤実さに答えるものとして示されたといえよう。

しかし、この大君の歌に対する薫の返歌は、それまで水面下に隠されていた薫の大君への思慕を明らかに表わしたものだ。薫は「つららとぢ」の歌と、「影さへ見ゆるしるしも、浅うははべらじ<sup>注10</sup>」という言葉によって、今まで表面的に維持されてきた伊勢物語、八十三段の情趣を一挙に恋の情趣へと転換してしまうのである。

このような薫の態度は大君にとっては、全く唐突であり、それは「思はずに、ものしうなりて、ことに答へたまはず」という箇

所に凝縮されて示されていく。以上の事情に、薫と大君の關係のあやにくさも、齟齬していく必然性も充分示されていると思うのである。

つまり、薫が故八の宮との親交を強調するのは、確かに真実であり、（そのような事情を説明するものとして、業平と惟喬親王の親交は持ち出されてきた）そのような薫に感謝の念を深めていく大君が描かれ、その方向に沿って、二人の距離は狭められていったのだった。しかし、薫の側が抑え難い大君への恋情を意識しそれを示すと、大君の側は、薫の中に異質なものを見てしまうのである。薫は、己の篤実さを強調することにより、大君との距離を狭めながらも、そのことにより、かえって、己の慕情を大君に認めさせることを、難しくしてもしまっているのであった。このような不協和音を孕みながら、薫と八の宮亡き後の宮家との関わりは密接になっていくのである。

## 二

### (一)

八の宮の一周忌をむかえるにあたって、薫の存在はもはやなくてはならぬものとして、捉えられている。「かかるよその御後見なからましかば、と見えたり」という箇所が、それを示していよ

うが、これは、姉妹の感想とも、又、語り手の感想ともそれようが、客観的事実として捉えることができる。

宇治を訪れさつそくに思慕の情を詠みかける薫に対して、大君は「例の、とうるさけれど」という心情を抱くのだが、匂宮のこゝとを持ち出し、又、「ともかくも思ひわくらむさまなどを、さはやかに承りにしがな」という正面からの薫の問い掛けに対しては、真率な応待を大君は示している。その中に、大君のこの時点における考え方が表明されていると思われるので、みていきたい。

まず、「違へきこえじの心にてこそは、かうまであやしき世の例なるありさまにて、隔てなくもてなしはべれ」という言葉は、薫の「かばかりうらなく頼みきこゆる心に違ひて恨めしくなむ」という言葉に、正面から答えたものであると同時に、むしろ、今の薫との関係は「あやしき世の例」となるほどの親密さなのであり、それは薫の厚情に答えたいがためであることを、示したものである。このような大君の認識は、この後に続く薫に対する弁の君の言葉の中にも示されている。

かく山深くたづねきこえさせたまふめる御心ざしの、年経て見たてまつり馴れたまへるけはひも、うとからず思ひきこえさせたまひ、今は、とざまかうざまに、こまかなる筋聞こえ通ひたまふめるに……（後略）（総角二一九頁）

「かく山深くたづねきこえさせたまふめる御心ざし」とは、一節で述べたように、そもそもは、薫の故八の宮に対する友情ともいふべきものからきたものであると、大君はとらえていたのであるし、それは、大君の一方的な思い込みであつたわけではない。

八の宮生前は、法の友としての薫の厚情を、あるがままに喜びをもって受け入れていたのだが（八の宮の言葉に「かく、しばしば立ち寄せたまふ光に、山の蔭も、すこしもの明らむる心地してなん」とあつた。）八の宮亡き後事情は変わってきている訳であり、大君はそのような微妙な変化というものに、気付かずにはいられないのである。つまり、薫の厚情に深い感謝を抱きながら、今のままの薫との関係を保ちながら、その厚情を受け続けることへの躊躇と、しかし、現実の問題として、薫が既に宮家の内情にまで深く立ち入っているという事実への認識と、そのような複雑な状況の中で、大君は、とるべき道を決断することをせまられているのである。

女房達に指摘されなくとも、不如意な生活は身にしてみている。又、中の君の相手として薫のすすめる匂宮に対しては、不信任が先行している。そして唯一の頼りとなっている薫からは、今までの信頼を寄せ合うといった関係を変更することを迫られているのである。大君は、父宮の死後流れた一年という時を経た時点で、

自分達をとりまく状況がどのようなものであるのかを、把握した上で中の君と薫の結婚を願うに至るのである。そして、それは同時に大君の心情にも沿うものであった。つまり、その人柄を見極め、厚情に対しては深い信頼と感謝の念を寄せている薫に、中の君との結婚を許すという形で大君側の誠意を示したいという思いと、又、姉君として中の君の将来の幸せを図ってやりたいという思いと、その両方を実現できる道であったのである。

このようにみていくと、大君が中の君と薫の結婚を願うということは、八の宮亡き後の宮家の姉君として、自分達がおかれた状況をはっきりと認識したが故に、又、その心情にも沿うものとして、ごく自然に大君の内面に生じたものであることが、明確である。が、この時点においては、どうしても実現しなければならぬ緊迫したものとしてではなく、仮定や願いとして思われていたにすぎない。しかし、大君はこの晩、危機的状況をむかえ、大きな揺さぶりを受けるのである。

## (二)

「もの恨みがちな御気色やうやうわりなくなりゆく」という薫の態度に煩わされながらも、「おほかたにてはあり難くあはれる人の御心」という思いに立つと、「こよなくもてなしたがた

く」、大君は薫との対面の夜を過ぐす。今までみてきたように、この「おほかたにてはあり難くあはれ」というものこそ、大君が薫に抱いている率直な心情とみてよいだろう。薫は大君の気配を真近に感じ思いを募らせ、「屏風をやをら押し開けて入りたまひぬ」という行為に及ぶのである。そのような薫の行為に対する大君の反応は、「いとむくつけ」く、「いみじくねたく心憂」く、「言ふかひなくうし」という、批難、苦悩の思いであった。

「かかる御心のほどを思ひ寄らで、あやしきまで聞こえ馴れにたるを、ゆゆしき袖の色など見あらはしたまふ心浅さに、みづからの言ふかひなさも思ひ知らるるに、さまざま慰む方なく」と恨みて、何心もなくやつれたまへる墨染の灯影を、いとはしたなくわびしと思ひまどひたまへり。(同二二五頁)

吉岡曠<sup>注11</sup>氏は、この場面で大君が結婚を拒否する転換点であるとされているので、氏の御論を検討しながら、大君の心情描写に注目していききたい。氏は、大君が「喪服姿のまま男と結ばれることを恥ずかしくつらい」と思ったのであり、薫と結ばれることを拒否したのではないと述べておられるがいかがであろうか。確かにこの場面で喪服姿が強調されているようではあるが、私は、むしろ「みづからの言ふかひなさ」という語に、姫君としての矜持を傷つけられ、しかし、それを己の責任として受けとめようとする

大君の痛恨の思いを読みとりたいと思う。薫は大君の髪に直接手を触れ、大君の顔を真近に見ているのである。大君の側からすれば、このような事態はほとんど決定的な、自分の八の宮の姫君としての存在を揺るがす程のできごとであったはずである。そして、喪服姿であったという状況は、大君の嘆きを弥増するものとして働くのであり、それは、「さまざま慰む方なく」という大君自身の言葉に明らかであろう。大君はこの時点において、依然として薫の視線にさらされているのであり、「いとはしたなくわびし」という思いも、薫にさらされている自らの喪服姿に対する、いたたまれぬ——女君としての生の感情であろう——思いの表出として捉えなければならないのではなからうか。

同時に大君は、このような事態に至った非を、自分の側にも認めているのであり、そのような己に対する自責の思いや、恥といったものを抱いているのであり、そのような状況の中で薫と結ばれる覚悟がなされたとは読みとりにくいのである。

しかしながら、「空のあはれなるをもろともに見たまふ」「女もすこしるざり出でたまへる」と、嫌悪感のみではない大君の薫に対する心情が描かれるのも事実である。が、それは「はかなく明け方になりにけり」と、この場面においてもはや危機的状況が過ぎ去ったことが表明されてからのことなのであって、「やうや

う恐ろしさも慰みて」と、大君は従来の薫に対する心象をとりもどしたのだとみてよいだろう。

「かういとはしたなからで、物隔ててなど聞こえば、まことに心の隔てはさらにあるまじくなむ」という言葉も、次に続く「今だに。いと見苦しきを」と同様、退出を促す言葉としてとりた。大君は薫の突然の無体な行動に傷つき、悲嘆するのであるが、そのような体験の中でも、薫の理想性を認める一面があったことも又、事実である。しかし、そのような揺れを含んだ大君の薫への心情の中に、薫思慕の思いまでを読みこんでしまっているものかどうか。この一夜の体験が大君の思惟にどのように影響を与えていくのか、読み進めていきたい。

### (三)

まず、大君に自覚された「頼もしき人なくて世を過ぐす身の心憂き」という思いは、この一夜の体験そのものをさしていると思われる。つまり、男君の突然の侵入というような事態を避けることができない状態、「頼もしき人」に守られることなく、世の中に己の身一つで対していかなばならない現状への嘆きの思いであろう。これは、「心より外の事ありぬべき世なめり」という自覚につながっていくのである。つまり、自分の意志とは無関係に男

君と結婚させられる可能性が充分あることに思い至るのである。その上で次の大君の思惟は導かれてくるのである。

まず大君は、「この人の御けはひありさまのうとましくはあるまじく」と、薫の理想性を再確認し、「我よりはさま容貌もさかりにあたらしげなる中の宮を、人並に見なしたらむこそうれしからめ」と、中の君と薫の結婚を願う気持ちを強くさせているのである。同時に、「みづからはなはかくて過ぐしてむ」と、自身は独身で通そうとの意志をみることができぬ。

この大君の姿勢をめぐって、従来様々に論じられてきたのであるが、私は、高野氏の次の様な御論<sup>注12</sup>に従いたいと思う。氏は、大君の拒否は自身が後見となることにより、中の君と薫の間に正式な（後見のある）結婚を実現させたいが故のことであると述べられた。「みづからの上のもてなしは、また誰かは見あつかはむ」という箇所、大君が後見のない、正式でない結婚を避けようとする姿勢が読み取れようとするものである。しかし、氏は同時に薫への大君の「あはれ」の情を指摘されているがいかであろうか。

この場面において、大君の薫への思慕を認めるという読みは広くなされているようである。たとえば、森一郎氏<sup>注13</sup>は、「中の君をと決意した心底には、妹への愛もさることながら、容姿の卑下、

後見という条件についての卑下があり、何よりも、相手（薫）がもし並みの男だったら応じもしようがという心に、薫への卑下、つまり慕情があるのだ。」と述べられた。ここで問題となってくるのは、大君の思惟の後半部である。

この人の御さまの、なのめにうち紛れたるほどならば、かく見馴れぬる年ごろのしるしに、うちゆるぶ心もありぬべきを、恥づかしげに見えにくき気色も、なかなかいみじくつましきに、わが世はかくて過ぐしはててむ」と思ひつづけて、音泣きがちに明かしたまへるに、なごりいと悩まなければ、……（後略）（同二三〇～二三二頁）

確かに、この箇所からは大君の複雑な屈折した思いが読みとれると思う。薫の「恥づかしげに見えにくき気色」が妨げとなっておりとも読める。が、私はそのような思いのより根本にあるものを読みとりたいと思う。「うちゆるぶ心もありぬべき」という表現に注目したい。この「ぬべし」という強い表現は、「かく見馴れぬる年ごろのしるし」に照応するものであろう。つまり、「かく見馴れぬる」という状況からは、本来ならば当然「うちゆるぶ心」も持つべきなのであるが、という文脈として読めようと思う。婉曲に表現されているが、指すところのものは実は、薫侵入の一夜に他ならぬであろう。当時においては、垣間見されてしまうこ



とさえ、姫君の心浅さとして批難されるべきことであつた。そのような当時において、薫との一夜は大君の身にとって決定的な打撃であつたはずである。本来なら、不測にもそのような事態に至つた場合、首尾よく周囲の承認も得る形で、後見をたてて結婚するのが、最も穩当で賢いとされる対処の仕方であつたはずである。玉鬘と鬚黒の結婚における、玉鬘のふるまいに与えられた賞賛を思い起こせばよい。が、後見をもたない大君には、それは到底不可能なことであつたのだ。

大君は、「うちゆるぶ心もありぬべき」と、本来ならそのようにすべきであることを充分認識しながらも、それができぬ境遇であることを、良く納得しているのである。そのような自分の力ではどうしようもできない、悲しいあきらめの思いが、そもそも薫は自分には不似合なのだという、己を心情的にも納得させる別の理由を必要としたのではなかったか。宮家の姫君にとって、決定的な傷ともなるべき薫との一夜を、大君は自分の心一つに収めて、「わが世はかくて過ぐしはててむ」という、悲愴な決意をたてるのである。

以上の様に読んでいくのなら、大君の屈折した思いの中に、薫への思慕を読みとる必然性も薄れていくと思うのだが、いかがであらうか。確かに、「うとましくはあるまじく」と、好感を抱い

ているのであるが、又、そうでなければ中の君との結婚を願うということもあり得ないわけで、その、薫に対する評価を薫思慕というものに横すべりをして捉えてはならないのではなからうか。つまり、大君が正式な結婚にこだわる以上、薫との結婚も大君の内面においては、絶対に不可能なのであり、そのような認識に立つ以上、きっぱりと、「わが世はかくて過ぐしはててむ」という道を、自らに強いるのが大君にとっての自然な道筋だったのである。そして、一度その様に思い決めた以上、薫思慕というような思いの入りこむ隙などもなかったはずである。

薫との一夜は、自分達姉妹が今のまま独身の状態を守り通すことが、ほとんど不可能であること——つまり、いつ又、男君の侵入という事態を迎えても不思議ではないということ——を、大君に自覚させ、その上で、正式な結婚に大君がこだわる以上、自らが後見となり、中の君と薫を結婚させるということが、大君のとり得る最も現実的な結論であつたのである。大君は、八の宮亡き後の自分達の置かれた不安定な状況を、一夜の体験を通して改めて悟つたのである。そして、そのような決意の裏には、自分一人の力ではいかんともしがたい不如意な現実に対する、悲しいあきらめの思いが存したのではあるが、大君は、この決意を実現させようと、努力を重ねるのである。

「九月も静心なくて、またおはしたり」という薫の訪問に大君は油断できぬものを察し、「せめて恨み深くは、この君をおし出でむ」と決意した通りに事を運ぼうとする。「気色だに知らせたまはずは罪もや得む」と、大君は中の君に結婚の事を仄めかすのだが、そこでは自らの結婚の否定の根拠に八の宮の遺言が持ち出される。が、それが中の君を納得させ得ないのは当然であった。しかしながら、大君は姉として現実を把握した上での考えであっても、それを具体的に説明することが困難であったことは、事が薫の添い伏しに関わるだけに想像に難くない。大君は、既に姉君としての責任を一人で果たす決意をしているのである。

そのような大君の真意を計りかね、「一ところのみやは、さて世にはてたまへとは聞こえたまひけむ」と、単純に八の宮の遺言を標榜し得る中の君は、現状には疎い姉君に守られた存在であることを、逆に明らかにしているといえる。

げにといとはしくて、「なほ、これかれ、うたてひがひがしきものに言ひ思ふべかめるにつけて、思ひ乱れはべるぞや」と、言ひさしたまひつ。(同二三六頁)

ここで湖月抄<sup>注14</sup>は、大君が「中の君の理に屈し」たのであると指摘

しているが、いかがであろうか。むしろ、中の君の思いは思いとして、「げに」と納得もし、「はかばかしくもあらぬ身のうしろめたさは、数そひたる」という中の君の言葉を「いとほし」とも思い、それ以上の説得はなし得ず、「言ひさしたまひつ」——言うのをひかえた——ととるべきではなからうか。

中の君への説得は断念せざるを得ぬ大君であったが、薫に対しては弁の君を通して、自分の考えをどうしても受け入れてもらわねばならぬという緊迫した状態にあった。その、弁の君への言葉の中で、「まことに昔を思ひきこえたまふ心ざしならば、同じことに思ひなしたまへかし。心の中はみな譲りて、見たてまつらむ心地なむすべき」と、大君は説得を試みるのだが、この大君の言葉をめぐって、大君の二元的（つまり、肉体的に結ばれることを拒否し、精神的な恋を成就させることを意志しているという）な考え方や、あるいは、自己愛といったものが指摘されているのである。

まず、「まことに昔を思ひきこえたまふ心ざしならば」という言葉に関してみていこう。既にみてきたように、大君が深い信頼を寄せ、又、心動かされもしているのは、薫の八の宮生前から寄せられた、八の宮家に対する篤い心に対してであった。そして、薫自身もそれを標榜することによって、八の宮亡き後、姫君達へ

対していったのであった。「まことに」、のこされた私共への厚情が、故八の宮への志に連なるものであるなら、中の君と自分とを同じに考えてほしいという主張も、大君の思惟においては、自然なことであつたし、又、薫と姫君達との関係の経緯も、そのようなものとしてあつたのである。

しかし、同時に大君はそのような理屈のみで薫を説得できるとも考えていない。「心の中はみな譲りて、見たてまつらむ心地なむすべき」と大君は言葉を続ける。「心の中はみな譲りて」の心に込められたものがどのようなものであつたかが問題となろう。先程も触れたように、そこに恋愛の情を認めるのが大方の解釈である。しかし、続く大君の「昔より思ひ離れそめたる心」という言葉に注目した時、そのような恋愛の情が入り込むような、微妙な心情であつたとは受けとれないのである。この「昔より思ひ離れそめたる心」とは、薫との一夜の体験の後なされた「わが世はかくて過ぐしはてなむ」という決意の、より深い自覚として、大君の生き方を規定していくべきものとして示されたとみてよいだろう。現実の自分が——世に人めきてあらまほしき身——ではない以上、——思ひ離れそめたる心——を自分の心として甘受するのが、大君にとって最も自然な心の経緯だったのである。

大君の「心の中はみな譲りて」という言葉には、自らが拠り所

としなくてはならない薫の情愛を、大君なりに受けとめつつ、常に親切的な温情を示してくれた薫に対する親しみや信頼感を、中の君との結婚を認めることにより示したいという、大君の精一杯の真心が込められているのだといえよう。

私は、以上のような大君の思惟に潔癖で清浄なものをみたいと思う。結婚拒否——むしろ、断念といった方がより大君の真実に近いかもしれない——という、一見不毛な決意も、大君が本来的に志向するものではなく、不遇な現実の中で選び得る、最も賢明な判断としてあつたのである。大君は、決して観念的な人物でも浪漫的人物でもなく、きわめて鋭く、己をとりまく現実と対決しつつ歩んでいこうとした姫君であつたといわねばなるまい。

大君の誤算は、薫の執着の深さを看取し得なかったことにあると言えるかもしれない。しかし、不如意な、酷薄な現実への対処の中から、悲嘆の情を伴いながらも、「思ひ離れそめたる心」を選びとらざるを得なかった大君に対して、薫の側は、「いかなればいとかくしも世を思ひ離れたまふらむ」と、あくまでも浪漫的な理想像を見い出すのであり、この二人の懸隔はあまりに大きいと言わねばならぬであろう。

薫はあやにくな中の君との一夜を過ごした後、それを大君の計画的な仕業と誤解し、中の君と匂宮との結婚を画策する。薫の計画は、中の君と匂宮の結婚を成立させ、大君は深い失意に沈みながらも、「のがれがたき御契」として受けとめ、中の君の世話に専念するのだった。さて、中の君と匂宮の結婚が大君の意に反して成立した後、依然として大君と薫の結婚の可能性はのこされている訳である。それでもなお、大君が薫を拒み続ける理由が改めて問われてくる。

(一)

まず注目したいのは、薫から中の君と匂宮に関する計略を打ち明かされた時の、大君の絶望の深さである。薫への言葉の中で、「知らぬ涙のみ霧りふたがる心地してなむ」、「夢のやうにあさましき」と、身の置きどころのない悲嘆が示され、それは「心より外にながらへば」と、暗い死の予感として大君に自覚されているのである。つづく、「心地もさらにかきくらすやうにて、いと悩ましきを」という言葉には、この事態がいかに大君を深く追いつめたかが示されているのである。このような死への傾斜は、「世の中に久しくもおぼえはべらねば」という大君の中の君への言葉の中にも示されている。

無論、このような死への傾斜は、八の宮の死を迎えたその時にも示されていたのだが、それは姉妹共通の父宮の死を傷む思いとしてのものではなかったので、再びその様な思いが描かれるのは、薫侵入の一件の後の大君の心境においてであった。しかし、既に見てきたように、その時点においては、大君は不如意な現実を見定め、受け入れ、そしてそれに対処していくことにひたむきになっていたのであり、そのように主体的に生きようとしている限りにおいては、死への傾斜も抑制されていたとみることができよう。しかし、事態が進み、中の君と匂宮の結婚という「本意ならざりし事」が起きるに至っては、もはや大君は、悲嘆の思いとともに選びとった決断——中の君と薫の結婚——が、自らの掌握し得ぬところでも容易に破れていくことに、深い失意の念を抱かずにはいられないのである。そのような大君にとっては、死への傾斜も必至であったと言わねばなるまい。

そのような状況にある大君であることを解して、はじめて、匂宮の訪れを待つ中の君の思い悩む姿をみても、「身にまさりて心苦し」と、その苦悩に対し中の君以上に過敏に反応してしまう、大君の姿をも、納得し得るものとして捉えることができるのであるまいか。

我もやうやうさかり過ぎぬる身ぞかし。鏡をみれば、瘦せ瘦

せになりもてゆく。(後略)(総角二七〇頁)

恥づかしげならむ人に見えむことは、いよいよかたはらいたく、いま一二年あらば衰へまさりなむ。はかなげなる身のありさまを。(同二七一頁)

ここでは確かに己の「衰へ」が薫との結婚を避ける理由として働いているのはあるが、己の中にそのようなものをみてしまうのも、既に積極的に主体的に人生と対峙していくだけの、意志を失った故の事として捉えることができようと思う。すなわち、ここも死の方向へと足を進めている大君の一つの姿なのである。

(二)

「九月十日ほど」、薫は匂宮を誘い宇治を訪れる。

さかしら人のそひたまへるぞ、恥づかしくもありぬべく、なまわづらはしく思へど、心ばへののどかにもの深くものしたまふを、げに、人はかくはおはせざりけり、と見あはせたまふに、あり難し、と思ひ知らる。(同二七七頁)

大君の、薫に対する肯定的な評価である。「恥づかし」、「なまわづらはし」と複雑な心情を抱きながらも、匂宮と比較した時に薫の「心ばへ深くものしたまふ」という人柄を「あり難し」と、再確認するのだった。これは、理性的な判断であるが、次の描写

は心情的な部分にまで踏み込んだものであろう。

なほひたぶるに、いかでかくうちとけじ。あはれと思ふ人の御心も、必ずつらしと思ひぬべきわざにこそあめれ。我も人も見おとさず、心違はでやみにしがな(同二七八頁)

ここは、従来、大君の永遠の愛、不易のあはれの志向の、一つの徴証として読まれてきた。すなわち、結婚を拒否することにより、薫との変わることのない純粹な「あはれ」を保持しようとする姿勢をみるものである。

まず、「あはれと思ふ人の御心」の解釈が問題となろう。確かにここでは先程の客観的評価から一歩進んだ大君の心情が示されている。しかし、この「あはれ」に積極的な深い感情を認めてよいだろうか。「あはれと思ふ人の御心」という表現は、直接的な薫その人へと向かっていく生々しい心情ではなく、ある程度客観性を残した、一歩退いたところからの表現ではなかろうか。一文全体を見渡した時は、どのようになろうか。まず、従来の解釈のように、「結婚をするのなら」という条件をつけずに解せないであろうか。「わざ」という言葉に注目したい。「深い意味や、重大な意図をもつ行為や行動」あるいは「物事のもつ深い事情や状態、次第などを問題としている」——『<sup>注15</sup>日本国語大辞典』からの抜粋である。この一文において「わざ」がさすものは、「あは

れと思ふ人の御心」であろう。つまり、「あはれと思ふ人の御心」そのものが、必ず、「つらし」と思はなければならない、そのような契機を含んでいるのだ、という、大君の判断が示されていると思うのである。

又、「つらし」とは石川徹氏の御見解<sup>注16</sup>によれば、「冷酷ダ、ヒドイ、という被害者のような気持ちで相手を恨むとき」に使われる言葉であるという。引用した箇所から遡りみていくと、「やうやうことわり知りたまひにたれど、人の御上にてもものをいみじく思ひ沈みたまひて、いとどかかる方をうきものに思ひはてて」という描写につながっていくものとして述べられていたのであった。つまり、大君は中の君をみつめ続けることにより、男君との関係そのものに、苦悩の源泉をみてしまい、そのようなものを、「うきものに思ひはてて」いるのである。

そのようにみていくのなら、大君が結婚を拒否することにより、「あはれ」の永遠化を求めたという解釈も成り立ちようがないと思うのである。大君の「あはれ」という思いは、薫に直接向けられているものではないと同時に、大君は、その男君の心自体に、加害的な性格をみ、男君との関係そのものを、「うきものに思ひはてて」いるのであり、結婚を拒否すれば、愛の永遠化をはかれるとは思っていないのである。

「我も人も見おとさず、心違はでやみにしがな」の一文も、「つらし」と恨んだりすることなく、今のままの穏当な状態を保ちたいとする大君の思いを示しているように思うのである。そして、このような消極的な考え方の裏にも、大君の死への傾斜は読みとれよう。

大君の内面において、けしてなまなましい心情としてではなくとも、一度、「あはれ」と認められたものは、直ちに否定されそれ以上発展していくことを断たれるのである。しかし、「常よりもわが面影に恥づるころなれば、うとましと見たまひてむも、さすがに苦しきは、いかなるにか」という、大君の薫への言葉の中には、その「あはれ」の仄かな余韻が読みとれよう。

(三)

いったんは、中の君と匂宮の結婚の行く末に安堵の思いを抱いた大君であったが、紅葉狩の一件、そして匂宮と六の君の結婚の噂により打ちのめされ、病の床についてしまう。その大君を見舞う薫に対する大君の心情が次の様に描き出される。

直面にはあらねど、這ひよりつつ見たてまつりたまへば、いと苦しく恥づかしけれど、かかるべき契りこそはありけめと思して、こよなうのどかにうしろやすき御心を、かの片つ方

の人に見くらべたてまつりたまへば、あはれとも思ひ知られにたり。むなしくなりなむ後の思ひ出にも、心ごはく、思ひ限なからじ、とつつみたまひて、はしたなくもおし放ちたまはず。(同三〇九頁)

この「あはれとも思ひ知られにたり」とは、薫の「こよなうのどかにうしろやすき御心」に向けられた大君の心情とっていいだろう。そして、これは又、「むなしくなりなむ後の思ひ出にも、心ごはく、思ひ限なからじ」という、心遣いにもつながっていくものとして、純粹なものとしてとらえることができる。

しかし、この時点において大君の衰弱は甚だしいものであり、大君自身においても「むなしくなりなむ」と死は自覚され、又、見守る薫の側も「むなしく見なして、いかなる心地せむ」と死を予感しているのであり、そのように避け得ぬ死を前にしてはじめて認められた心情であることは看過できぬであろう。加えて、「かの片つ方の人に見くらべたてまつりたまへば」と、匂宮と比較された上での「あはれ」であることにも注目したい。言うまでもなく、大君にとって匂宮こそが、その絶望の根源であるのであって、その匂宮と比較された上での「あはれ」に、深甚なるものを見ることはできまいと思うのである。

つまり、大君の薫への「あはれ」は、死の予感によりその発展

性を閉ざされた形で、しかも、匂宮との比較における「あはれ」である以上、その持つ意味を減ぜられた形でしか示されなかったと言ふべきではないか。

さて、この後、大君は阿闍梨から八の宮が往生し得ていないことを聞かされ、その死への傾斜を一層深めていく。

みづからも、たひらかにあらむとも仏をも念じたまはばこそあらめ、「なほかかるついでにいかで亡せなむ。この君のかくそひるて、残りなくなりぬるを、今はもて離れむ方なし。

さりとて、かうおろかならず見ゆる心ばへの、見劣りして我も人も見えむが、心やすからずうかるべきこと。もし命強ひてとまらば、病にことつけて、かたちをも変へてむ。さての

みこそ、長き心をもかたみに見はつべきわざなれ(同三一三頁)

大君は病床にあって薫の看病を受けたことにより、「残りなくなりぬる」という既にひき返すことのできぬ、薫との関係を「今はもて離れむ方なし」と自覚するのだった。そのように追いつめられた大君は、死か、さもなくば出家か、という形で薫との関係から逃れようとする。そこには、男女の愛情関係において「見劣り」することは避け得ぬのだという、大君の確信に近い思いがあったことを見逃すことはできまい。

さて、「長き心をもかたみに見はつべきわざなれ」の解釈も、薫への「あはれ」を温存したままで出家を果たし、それにより、互いの「あはれ」の変易を避けようといったものではなく、「心やすからず、うかるべき」ことをあくまでも避け、出家を果たすことにより、「あはれ」の世界に踏み込まずに、互いの安らかな心情を見果て、静謐な状態を保とうとする姿勢として読みとるべきではなからうか。既にみてきたように、大君の内面において、積極的な肯定的な、全的な「あはれ」の情は認められなかったのであり、そのような大君において、「あはれ」の永遠化への希求という姿勢をみることはできないと思うのである。

むしろ、最後まで「あはれ」の世界の中に立ち入ることを避けようとしたのであり、又、それ故に到達した大君の境地は、ある種の窮みにまで達していると思うのである。

死を直前にして、「聞こえまほしき事もはべれど、ただ消え入るやうにのみなりゆくは、口惜しきわざにこそ」と薫に対して語った、その最期の言葉は次の様なものであった。

かくはかなかりけるものを、思ひ隈なきやうに思されたりつるもかひなければ、このとまりたまはむ人を、同じことと思ひきこえたまへ、とほのめかしきこえしに、違へたまはざらましかば、うしろやすからまじと、これのみなむ恨めしきふ

しにてとまりぬべうおぼえはべる（同三一七頁）

大君にとって、最後の気懸かりは中の君の事のみであった。自らの死を、「かくはかなかりけるもの」と、その不如意な現実を受け入れたと同様に静かに受けとめる大君である。

その死の描写に関しては、伊原<sup>註17</sup>氏の詳細な分析によりたいが、氏が指摘されたように、大君の生と死が「色なきもの」によって、統一させられたのも、大君が、「あはれ」の世界に背を向けるといった、一貫した潔い清浄な生を全うしたことを象徴しているといえないだろうか。その生が、大君が現実と対決していく中で、必然的に選りとられた道であった故、大君の到達し得た世界が、物語の中で重みを持ったものとして示されたのである。

## 結び

大君にとって、結婚を拒否することが最終目的であった訳では無論ない。むしろ、不如意な現実から、あきらめや悲嘆の思いを伴って選り取られた道であった。そのような道を選んだ大君にとって、「あはれ」の世界は必然的に遠ざけられたとっていいだろう。「わが世はかくて過ぐしはててむ」と決意した時、大君は一人、そのような孤独な世界に向って歩み始めていたのである。しかし、同時に、一人の女君として、薫の「心」にひかれるも



のを感じながらも、その「あはれ」の世界を封じこめようとする大君をもみることが出来る。それを、ある種の頑なさ、偏狭さと捉えることも、もしかしたら、可能なかもしれない。

しかし、大君の生の軌跡を辿っていくのなら、大君が、最終的に「あはれ」の世界に背を向けたままでその死を迎えたのは、一度歩き始めた、「わが世はかくて過ぐしはてむ」という道の果てに必然的に行き着いた境地ともいえよう。つまり、この時点に至って、忽然と「あはれ」の世界に分け入っていくことが、可能であったかどうか。その方がむしろ問題であると思う。

源氏物語において、「あはれ」の世界は、様々な光と影を持つものとして描かれている。大君は、確かにその一面である、影の部分をしきみよとしなかったといえる。しかし、大君の生が、己をとりまく現実一杯対処しながら辿られてきたことを思う時、大君がみたその「あはれ」の一面は、確かに一つの真実をさしているのである。

大君の世界は孤絶な世界であったといえよう。しかし、その孤絶故に到達し得た大君の精神世界は、静謐さとある種の安らぎに満ちたものではなかったか。大君の死の描写において、懊悩にのたうつ薫の姿が際立って描かれているのであるが、そのような姿をこそ拒む大君の生と、そして死ではなかったか。残された薫は

その大君への「執」故に、彷徨うことを余儀なくされ、新しい物語が語られ続ける。しかし、大君の世界は、その死をもって、一つの窮まった精神世界を示して終るのである。

#### 注

- 注1 藤村潔『源氏物語の構造』（桜楓社 昭和46）深沢三千男『源氏物語の形成』（桜楓社 昭和47）武原弘「大君の世界」『源氏物語の探究』第二輯 風間書房 昭和51）等。
- 注2 千原美沙子「大君・中君」『源氏物語講座』第四巻 有精堂 昭和46）高橋亨「大君の結婚拒否」『源氏物語の世界』第八集 有斐閣 昭和58）
- 注3 武者小路辰子「源氏物語の結婚観」『源氏物語講座』第五巻 有精堂 昭和46）
- 注4 高野裕子「大君試論」『源氏物語の探究』第八輯 風間書房 昭和58）
- 注5 前掲深沢三千男氏、武原弘氏、高野裕子氏、又、森岡常夫「宇治の大君論」『文芸研究』昭和37・4）小野村洋子「源氏物語の精神的基底」〔創文社 昭和45）
- 注6 吉岡曠「大君」〔別冊国文学 源氏物語必携Ⅱ』昭和57）
- 注7 引用は小学館日本古典文学全集『源氏物語』による。以下同じ。
- 注8 伊勢物語では、「おほやけごとどもありければ、えさぶらはで、夕暮にかへるとて」との記述がある。伊勢物語の引用は小学館日本古典文学全集による。
- 注9 「源氏物語玉のをぐし」のはし姫巻の注にみえる。

注10 注7のテキストの頭注にあるように、「安積山影さへ見ゆる山の

井の浅き心をわが思はなくに」(古今六帖では下の句「浅くは人を思ふものかは」(万葉三八〇七))

注11 注6に同じ。

注12 注4に同じ。

注13 森一郎「宇治の大君と中の君」『平安文学研究』昭和51・6)

注14 『湖月抄』(文献書院第五冊)六〇五頁

注15 『日本国語大辞典』(小学館)

注16 石川徹(『源氏物語語彙辞典』『源氏物語必携』学燈社 昭和42)

注17 伊原昭「源氏物語の美——死にかかわる描写をとおして——」

『語文』昭和53・12) 伊原昭「宇治の大君」(『源氏物語の探究』

第八輯 風間書房 昭和58)

(昭五九 修士課程修了)